

## 南ドイツ・スイス視察・研修報告（14. Jan-15. Feb. 2013）

伊藤 真人

今回、約1カ月間のヨーロッパ研修の機会を頂き、南ドイツのヴェルツブルグとスイスのチューリヒ（Prof. Fisch）、ルツェルン（Prof. Lindau）を訪問した。目的は①小児の人工内耳後のハビリテーション・システムの視察と、②耳科手術とくに外側頭蓋底手術の研修である。いろいろなことがあった1カ月で、全てをここに書く事はとてもできそうにないので、最初に訪れたヴェルツブルグ CICSud（人工内耳センター）の様子を紹介する。このセンターへは長崎のベル・ヒアリングセンター神田幸彦先生のご紹介をいただきました。

まだ時差ぼけが残る中、フランクフルト中央駅から ICE625 でヴェルツブルグへ出発。天候不良で出発の列車が遅れて、ホームで凍えた頃に列車到着。



ヴェルツブルグに到着。小雪の降る中タクシーで Hotel Gruener Baum へ。マリエンブルク要塞の麓の小さなホテルだが City 中心部にも近くロケーション抜群。建物はかなり古い石造りで歴史を感じさせるが、部屋は改装後でパイン材を使った暖かな印象。バスルームもきれいで隅々まで磨き上げられている。



部屋に荷物を置いてから City へ。アルテマイン橋から見るマリエンブルク要塞が絵はがきのようなのだが、ヴェルツブルグ滞在中はずっと曇りか雪空で、如何にもドイツの冬という印象。レジデントは既に閉館しており City 中央部をぶらつく。マルクト広場周囲の露天のお店も閉店準備中。明日は朝から人工内耳センター（CICSud）訪問予定なので、早めに就寝。



早朝まだ真っ暗な中、路面電車（トレイン）でヴェルツブルグ CICSud（CI センター）へ。市内から少し離れており約 30 分で到着。CICSud の建物正面玄関ではなく裏庭から入りこんでしまう。

CICSud 所長の Mr. Rudi Kroker さんはじめ、スタッフにご挨拶。どうやら今回の訪問は正式なリストにのっておらず、秘書には話が入っていなかったようだ。しかし皆さんフレンドリーで、正式ルート外のまさに「裏庭からようこそ！」と歓迎された。

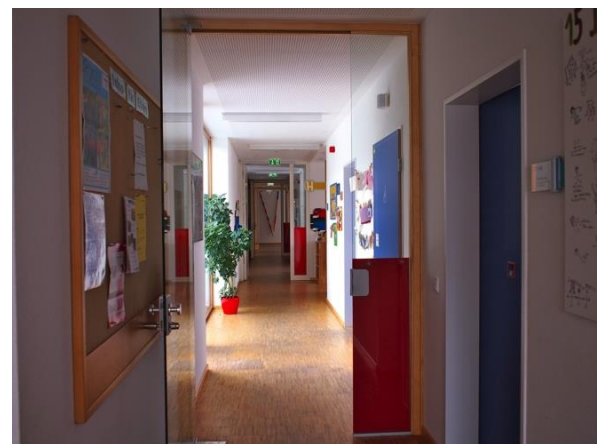


Kroker さんもとても friendly で、今回の訪問の目的を告げるとドイツの小児人工内耳術後のハビリテーションのシステムや抱える色々な問題点について、時間を割いてお話をしてくれた。昼食もセンターの YH 内の食堂で一緒して、仕事の後も他のスタッフが全員帰った後も外が暗くなるまでオフィスで話しができた。

所長の Kroker さん。心理学者。



明るい雰囲気のカシス CICSud の廊下。



ドイツで最初に設立された CIC はハノーバーのセンターで、規模も最大とのこと。ヴェルツブルグ CICSud はハノーバーの次にできたセンターで、教育（障害児教育）とリハビリテーションを総合的に行なうとても大きな総合施設の中に、独立した建物として人工内耳センター（CICSud）が設置されている。設立は 1995 年ごろで 20 年近い実績がある。CICSud には約 10 名の聴覚専門の先生（ST ではなく教職：ドイツでは言語聴覚専門の教育課程もあり、専門性が高い）がいて、南ドイツ各地から約 200 名の人工内耳術後の子どもが通っている。設立当時は南ドイツ全域から CI 術後の子どもたちが通園していたが、最近は同様のセンターがドイツ国内に全部で 22 カ所、規模は様々だが整備されたため、比較的近隣からの通園児が多くなったとのこと。数ヶ月前からは成人 CI ハビリテーション・プログラムも開始しており、数名の成人（後天聾だが失聴期間が長く、子どもよりもリハビリテーションが難しいと嘆いていた）が通っている。施設自体は半官半民だが公立にやや近いポジションにあり、通園費用は基本的に公的な保険（インシュアランス）がカバーしている。ただし公的保険でカバーされるのは術後の通園 60 日分のみであり、十分とは言えないのが現状とのこと。2 日間コースと集中的な 1 週間コースがあり、適宜使い分けている。（60 日分のインシュアランスは、2 日間コースだと 30 回分、仮に 1 回／月で通園すると 2 年半分で期間としては足りないが、2 日間みっちり評価と指導を受けているので内容は濃い印象）。健康保険システムはやや日本とは異なるようだが、この分野は教育と医療の狭間にあり、我が国同様その費用負担や管轄省庁が不明瞭という問題を抱えている。

CICSud においても、街の反対側にあるヴェルツブルグ大学 CI センターのテクニカル・スタッフが出張してきて、CI のマッピングを行なっているが、医師の診察はヴェルツブルグ大学病院でおこなわれている。CI 手術はヴェルツブルグ大学病院（クリニック）や他の病院で行なわれ、術後 4～5 週目に 2 日間クリニックに滞在してテクニカル・スタッフが CI センターで音入れ（First mapping）を行なっている。音入れでは患児が拒否反応を示さないように最小限音としての感知ができる程度の弱い電圧で行ない、以後はこちらの CICSud に通園となる。通園の頻度は 2～4 週おきから始めて、言語獲得の状況や両親の希望に合わせて通園間隔が変わってくる。ハビリテーション・評価は 2 日間と 5 日間（Week）のコースがあり、CICSud に滞在して行なわれる。

年齢も手術時期も微妙に異なる 4 名程度のグループをつくり、約 2 年間は同じグループで指導が行なわれ、2 年後にグループの入れ替えが行なわれる。CI 手術の年齢は最近では平均 1 歳程度（開所時は 4～5 歳だった）だが、髄膜炎症例などの急ぐ症例では生後半年以前でも手術は行なわれている。（後に訪れたスイスの CI センターでも平均手術年齢は 12 カ月とのこと）

たくさんの個室で個別訓練が行なわれている。室内には子どもの注意をそらすような余分なものはなく、がらんとした印象。訓練や評価に使うおもちゃやカードのたぐいも先生が管理しており、子どもは勝手に触ってはいけない。

話はそれるが、「ドイツも省エネで廊下も暗い」と、少し嘆き気味。脱原発に舵をきったことも関係するのかもしれない。ところで後にスイスでは、世間話で「日本の原子力発電問題」について再三聞かれた。スイスにも原発が数基稼働しているが、彼らは口をそろえて「原発反対、クリーンエネルギー賛成」というので驚いた。しかし後で、食事をしながらそっと、「公衆の面前では 90%の人が反対というが、ワインを飲みながら本音で話すと賛成、反対は五分五分だ」と教えてくれた。



実際のハビリテーションは、午前中は個別（レベルの近い1~2名）レッスン。午後はグループレッスン。45分間のレッスン+母親との懇談、15分休憩。先生と母親両方が療育カルテを共有し、ハビリテーションの進捗状況を確認するとともに、療育相談や進学相談に近いことも行なっている。以下に1日の様子を大まかに記載する。

9:00am

グループ全員集合して30分間のオリエンテーション。この間に、前回から今までの間に患児に何か変化はなかったかなどおおよその状態をつかむ。

9:45am

個別レッスン1限目。

- ・ 音色の違いの区別。プラスチックボックスの中に、ビー玉、さいころ、乾燥した米粒、塩、クリップ、鈴など似た音色のものを入れて、聞き分ける。
- ・ 聞き取りと言葉の記憶能力。絵カード遊びで、「花束とワインを、赤い足のついた青い机の、黄色いクロスの上に置く」などのタスクを行なう。私はドイツ語は全くできないので英語で参加したが、言葉の記憶というのは普段何気なく行なっているが、以外と難しい事を実感。
- ・ バランス、運動機能、計算能力。輪投げ（3名で5回の輪投げ、得点を最後に暗算） 写真では分かり難いが、多くの子どもが両耳に人工内耳装用している。



10:45am

個別レッスン2限目。

- ・ 作文能力：絵カードを組み合わせて即興で文章を作成するゲーム。
- ・ 「Activity」という市販の名前当てゲームを使用して、聴くこと、話すこと、身体を使って表現することなど、コミュニケーション能力を高める訓練。とにかく子どもが興味を持って、積極的に聴いて話すこと（人とのコミュニケーション）に喜びを感じる事が一番大切とのこと。



9歳女兒。かなり聞き取りは良い。私にはドイツ語の発音は分からないが先生とよく話している。作文能力も優れているが、母は今後の進学について迷っている。ドイツの基礎学校(Grundschule)」といわれる初等学校は4年制(6歳~10歳)で、その後11歳からは4種類の学校(高等教育用のギムナジウム:Gymnasiumから、職業訓練校である基幹学校(Hauptschule)および実科学校(Realschule)など、これら以外に特殊学校/特別支援学校がある)のどれかに進学を決めねばならない。ちなみにミュンヘン大学(聴覚の教育や医学の伝統+)のあるバイエルン州のみ言語指導教室があるが、基本的に特殊学級や通級制度はない。CICSudの先生は普通学校でも大丈夫ではないかと勧めているが、母親は患児が大勢の中でのコミュニケーション能力が低い事を気にしており、特殊学校も考えている。

いわゆる9歳の壁を前にしている症例。ドイツでは普通学校では聴こえの支援(FMシステムなど)はなく、特殊学校(聴覚部門=ろう学校)で聴こえの程度によるクラス別の指導が行なわれている。CI術後児のクラスではFMシステムも使用して、聴覚活用をある程度目指しているようだが、教育のレベルは決して高くはないようだ。というより日本と同様低いと言った方が良いのかもしれないが、ドイツでは伝統的に11歳からの選抜(エリート)教育を行なっており、ハンディキャップ・パーズンを無理に引き上げようとはしていない。良く言えば自然体、悪く言えば切り捨てともいえるが、これは15歳前後で手に職を持ち、労働者として働き始めることも多いドイツ(ヨーロッパ)ならではの、国全体の教育に対する考え方なのだろう。ろう学校でもCIを使用していないクラスでは手話が用いられている。CICSudでは術後何年も継続的に、小学校入学後もハビリテーションを行ない、9歳の壁を乗り越えようと努力している印象。言語発達の速度や達成度にはやはり個人差があるのだが、CI術後にはスピードの差はあれ、着実に言語能力は発達していくので、焦る両親を力づける事も大きな仕事になっている様子。

CI術後のハビリテーションは基本的にAuditory verbal therapy(AVT)で、国全体の言語教育は手話かAVTかに集約されている。AVTという概念そのものが米国以上に当たり前になっているような印象だが、この理由としてドイツでは聴覚口話法の長い伝統があり教員養成過程を含めて「聴いて話す」教育が一般化しているため、これが当たり前だと思っている様子。CICSudではSTが行なうような構音(発音)指導などは一切行なっておらず、人工内耳術後児では聴覚口話法というよりAVT法と思われる。

午前の見学を終え、ランチをご馳走になりながら施設長のKrokerさんとディスカッション。(後で振り返ると、この後もあちこちでいろんな人からランチやディナー、お茶やビールにワインまでご馳走になった。いきなり尋ねてきた初対面の日本人を、どうしてこんなに手厚くもてなしてくれるのかと不思議に思ったものである)

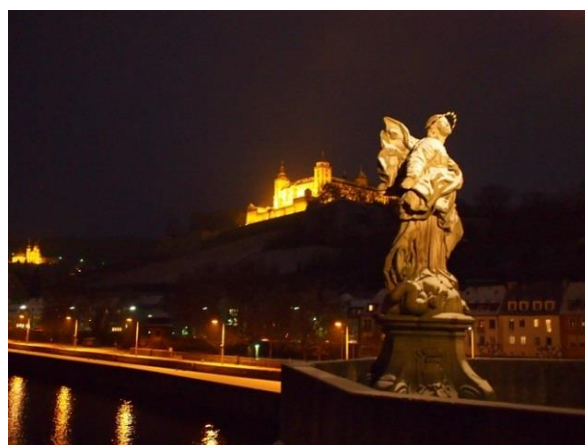
「CI 術後の子どもたちのハビリテーションで、何が最も重要か？」と、Kroker さんに尋ねてみた。答えは「きれいな発音で話ができる事ではなく、不特定多数の人とのコミュニケーション能力を培うこと」が一番大切だとのこと。家庭などの特殊な環境ではなく、一般の環境で人とコミュニケーションできるようにする事が大切であり、人とコミュニケーションする事でどんな良い事があるのかをなるべく多く知ることができるように仕向けて、聴く力と話す力をのばす事が肝要との答えであった。

13:30～ 午後はグループレッスン。

- ・ 水曜、金曜の午後だけ来ているという音楽教育の先生を交えてレッスン。音楽レッスンは最近始めた新しい試みだとのこと。先生2人、子ども4人で行なう。音楽にあわせて体を思い切り動かして踊る。音楽が途切れたところで、ピタリとフリーズする。全員で、次に一人一人実技。次に静止した体勢を記憶させておき、その後姿勢を変えて間違い探し。
- ・ リューダーの音の高さに合わせて手で高さを表現。人工内耳では結構難しいタスクか。
- ・ 物語の読み聴かせ。音読：「スノーマン」の物語。袋の中にスノーマンの人形を入れて手探りで今日の主題を当てさせる。次に先生が音読。年齢や言語のレベルに合わせて一人一人先生の椅子で音読させる。ドイツ語のため私には分らないが、発音のチェックもされている。
- ・ 単語力、筆記能力：「冬」のイメージから想起される短い文章を、中央においた大きな紙に書き出させる。うまく書けない子どもにはサポート。
- ・ 表現力：スノーマンの物語で一番印象に残った場面を絵で表現。時間は短く、ゆっくり考えている時間はない。思ったものを直感的に絵で表現。（ブレインストーミング）

子どもたちには、はじめはヤープンから来た変な医者、と思われていたようだがすぐに打ち解けて、何やらドイツ語で話しかけてくるので、先生に通訳してもらいながら子どもたちと話げできた。

スタッフも子どもも家族も帰った後、Kroker さんと夕暮れ時まで話し込む。Kroker さんは、まだまだ話したいことがあるようだったが、凍てつく夜の街で迷子になるのは嫌なのでお別れしてトレインでCityまでもどり、真っ暗になる頃にホテルへ。

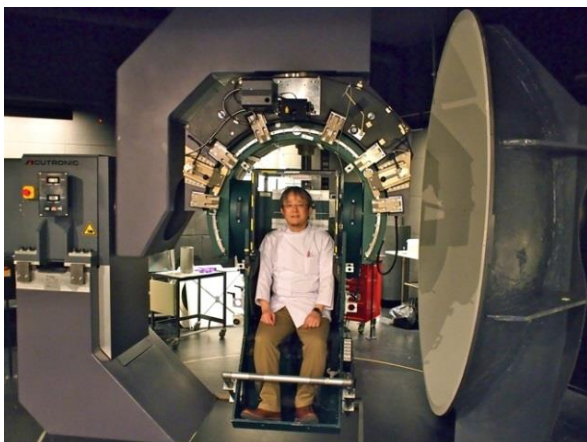


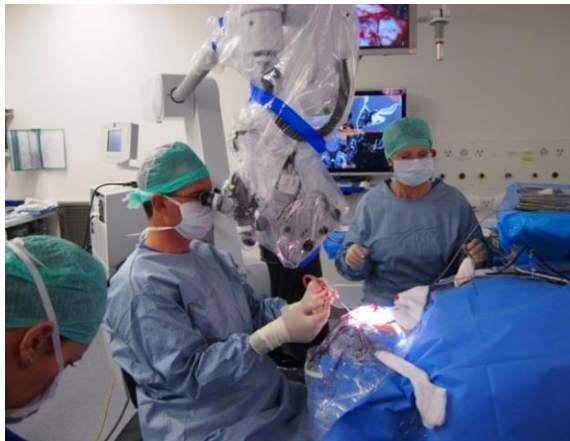
CICSud では施設やスタッフが充実している以上に、通っている子どもたちが生き生きとしているのが印象的であった。

以上は今回の視察旅行の最初に訪れた、ビュルツブルグの CICSud の記録である。この後、ビュルツブルグ大学、チューリヒ大学、ルツェルン州立病院などいろいろな施設で視察・研修をさせていただいた。記録は膨大でとてもここに全てを記すことはできないので割愛させていただく。そのうち、何かの機会にお話することができるかも知れないが、その後の旅の一端を、愛用の Olympus pen で撮った写真でお見せしたい。



巨大な平衡機能検査装置（チューリヒ大学）









300cc ベスパでディナーへ（道路は半凍結状態）



Fisch コース指導陣集合写真



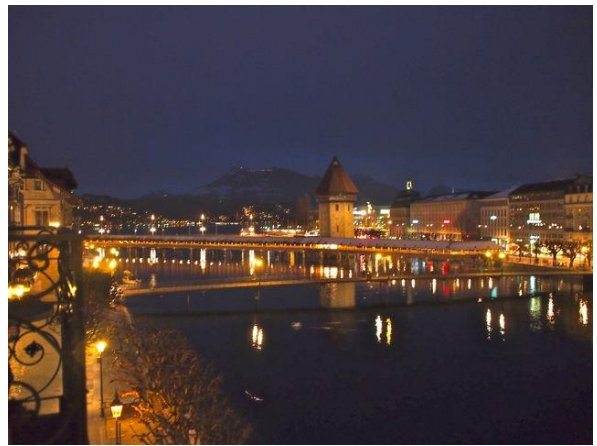
Prof. Fisch と Prof. Lindar



Reuge のオルゴール



カレル橋 四景





Luzern のファスナハト (カーニバル)

仮装?して



仲良くなったオランダの先生たちと祭りに参加!



最終日はバイエルン州立歌劇場でオペラ  
(ミュンヘン)

